

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第68回: 蕭美琴は行く

2024年3月28日配信

■蕭美琴(シャオ・メイテン)は2024年1月13日の台湾総統選挙で、頼清徳総統候補とペアを組み副総統候補として立候補し、当選した。

- ・前職は、駐米台北経済文化代表処代表(誤解を恐れずに言えば、駐米大使の台湾版)。
- ・蕭美琴は、敬虔なプロテスタントで日本に駐在していた台湾人の父と、神学校で音楽学士だった米国人の母との間に、神戸で生まれた。ただ、両親が正式な婚姻後に父の出身地である台南に住むことにしたので、神戸での生活は短く、育ったのは台湾だ。
- ・高校からは母の祖国米国で学び、大学も米国。最終的にはコロンビア大学で修士を取得した。ネイティブである英語、台湾語、中国語に加え、スペイン語や、米国留学中に学んだ日本語を自由に操ると言われている(本項はWikipediaによる。)
- ・その後種々のきっかけから1995年に民進党事務局に入り、1997年には国際事業部主任に就任し、当時最年少の26歳で党幹部になる。
- ・この頃から知名度が高まり、次期総統選候補となった陳水扁に見いだされ、陳が2000年総統選挙に勝利すると、当時最年少の総統府顧問となった。英語に堪能なため、秘書役として陳の随行通訳もこなした。
- ・なお、今回の総統選挙の際に、米国籍だとのフェイクニュースが出回ったが、米国籍を放棄し台湾国籍を選択していることを証拠書類により明らかにしている。

■その蕭美琴の最近の海外での動きが注目されている。

■まず、米国を非公式に訪問していることが、3月13日に台湾外交部からリークされた。

- ・前職の駐米台北経済文化代表処代表の際には、活発なロビー活動を展開し、ワシントンで議会を含む米側関係者内での人脈は幅広く、人気は根強い。
- ・実は、駐米台湾経済文化代表処の体制は人的にも物的にも非常に充実しており、在米日本大使館に勤務した際の経験では、非常に羨ましく思ったものだ。ワシントンでの議会への影響力や食い込みでは、トップはイスラエルだが、その次には台湾が来る、と言うのが大方の相場観だ。
- ・その彼女がなぜこのタイミングで訪米したのだろうか？台湾外交部は、荷物整理などの私的な訪問だとしているが、本当にそれだけだろうか？

- ・証拠があるわけではないが、おそらく、台湾の重要性、台湾が中国武力侵攻された場合の米国による直接関与の必要性について、特に議会要路に対して働きかけを行ったのではあるまいか。
- ・と言うのも、仮にトランプ再選となれば、トランプ氏が台湾に関心が無いことは、第一次政権の際に国家安全保障担当補佐官を務めたボルトンの回顧録などで明確に示されている。そして、有事に際して米国が台湾を守る積りが無いことが明らかになれば、中国に対し侵攻の大きな誘惑を与えることになりかねないのだ。台湾が心配する気持ちは大変に良く分かるし、その為の事前の働きかけをするに、蕭美琴程強力で適切なプレイヤーは居ないはずだ。
- ・台湾新総統の就任式は5月20日であり、蕭美琴が正式に副総統になって以降は、流石に米国を堂々と訪問するのは、中国との関係で難しいだろう(米国も困るだろう)。その意味で、この訪問は、目的もタイミングもピンポイントの大変に重要なものだと言える。

■更に、3月19日には、蕭氏がチェコを訪問していることが、同じく台湾外交部から発表された。

- ・報道官は、チェコのシンクタンクから訪問を招請されたと説明。講演を行うとともに、5月の就任に向け意見交換すると述べた。
- ・実際、2020年に台湾を訪れたチェコのミロシュ・ヴィストルチル上院議長は19日、蕭氏と歓談の様子をXに投稿した。
- ・なぜチェコなのか？台湾は、カリブ中南米、大洋州諸国を中心とする12カ国と引き続き外交関係を有するが、ここ暫く、中国は、台湾と外交関係を有する国に働きかけ、一つ一つその立場を変更させてきており、この面での台湾の外交的「生存空間」はじり貧になりつつある。
- ・その中で、ここ数年台湾が特に(外交関係開設には至らないまでも)関係強化に向けた働きかけを強めているのが、中東欧諸国である。
- ・中でも、リトアニアは、2021年11月に、通常は「台北」経済文化代表処と呼ばれる台湾の代表処を「台湾」代表処として自国に開設することを認める形で対台湾関係推進の先鞭を切り、これに対して中国は大きく反発した(台北は都市だが、台湾と言った途端に「国」のニュアンスが強くなる。)。その後、同様のことをする国は現れなかったが、台湾はチェコ、スロバキア、ポーランド等の他の中東欧諸国との関係を推進した。
- ・中でも、チェコは、同国のシンクタンク(「European Values Center for Security Policy (EVC)」)が2021年1月に欧州のシンクタンクとしては初めて台北に支部を置き(他は、ドイツのFNFのみ)、活発に活動している。
- ・今回の蕭美琴のチェコ補訪問もEVCの招聘と思われるし、EVCはまた、昨年6月14日には、主催する「2023年欧州価値サミット」に呉台湾外交部長を招待し、同部長は、パヴェル大統領に続いて講演を実施した。これは、一国の大統領が台湾の閣僚クラスの関係者と公開の場で同じステージに立った稀有な例である。

- ・また、チェコからは、2020年9月にヴィストルチル上院議長率いる89人の訪問団が訪台、2023年3月25-29日には、アダモヴァー下院議長が、政府関係者(含む防諜関係者)、メディア関係者、産学界の代表な度を含む過去最大の160人規模で台湾を訪問し、各種覚書を締結している。
- ・経済面でも、電子機器受託生産(EMS)で世界最大手の台湾の鴻海精密工業は、プラハとクトナー・ホラに製造拠点をもち、EMS大手のウイストロン(緯創資通)やペガトロン(和碩聯合科技)もチェコ内に製造拠点を保有。また、2023年7月18日からは、台湾では初となる台北・プラハ間の直行便が運航されている。
- ・今回、簫美琴が、中東欧諸国の中でもチェコを訪問先として選んだのは、現在の両者の関係の緊密さを示すものだと言えるだろう。

■簫美琴は、5月20日の副総統就任まで後2ヶ月を切るが、今後、更にどの国を訪れるのだろうか？

それは、台湾の生き残りをかけた選択を示すものになるだろう。簫美琴は行く！台湾の将来を賭けて！！！！

以上

りそな総合研究所 顧問 石井正文